

正岡子規における「食」の問題

黒澤

勉

(本稿は平成十四年三月二十日、東北歯科技工士教育評議会において講演したことをもとに、その折に話しきれなかったことを補いながらまとめたものである。講演の機会を与えて下さった岩手医科大学歯学部三浦廣行教授に感謝申し上げます。)

## 一 食べるということ

歯科医師、歯科技工士、歯科衛生士その他、歯科医療に関連する職業は、すべて歯の健康を守り、そのことによって人間の健康全体を維持し、明るく元気な生活が出来るように援助する仕事である。歯は、当然のことながら食べるという生命活動の根本にかかわる重要な器官であり、食べない者、食べられなくなった者は死ぬより他ない。現代では点滴によって栄養を受けて生きながらえることも、ある程度可能になっているが、口から食べることは、単に生きるための手段というのではなく、生きることそれ自体の大きな喜びであり、かけがえのない生の楽しさの一つである。

死にたしと口走りたるわが母の食ふを喜ぶ命なりけり

パーキンソン病を患い、歩くこと、立ち上がることもできなくなった私の母はホームに入所している時、幾度か「死にたい」と口走っていた。「そんなこと言わないで」と私はいさめたが、「死にたい」というのは母の正直な思いであつたらう。ところが、その母はケーキや饅頭など、口に運んでやると驚くほどによく食べた。死にたいと思うような辛く苦しい状況の中でも、食べることはおいしいことであり、肉体をもつ人間の最後まで残された楽しみなのである。

老いと、病いと、死という苦しみに向かっている、又、苦しみのさ中にある人生にあって、いかにして最後まで楽しみを享受できるかということとは現代人の、また現代医療の大きな課題となっている。食べるということも単に生きるための手段だとか、本能だ、などといって片付けられない問題なのである。そこで改めて、食べるということの意義をまとめてみると、たとえば次のようなことが挙げられるのではないかと思う。

① 食べることは、生命を維持する生命活動の基本である。その視点に立って科学的に摂食行動を研究したり、消化・吸収の仕組みや栄養などの問題に取り組んでいるのが生物学や医学などといった学問である。

② 食べることは、快感を伴う行為であり、おいしいものを食べることは生きていくことの喜びである。逆に食べられないことは大きな苦しみであり、人は生きていくために食を求める。それを満たすために食にかかわる産業がある。

③ たった一人で食べるのでなく、家族や友人などと共に食べることは、人々との絆を深め共同体の結びつきを強くする。特に家族共同体の形成にあたっては、共に食べることを抜きにしては成り立たない。また、職場や趣味のサークルなどにおいても、忘年会とか新年会など、会食を共にすることによって絆を深めている。

④ 食べることは精神的、文化的な意味づけがなされることによつて、宗教や文学とも深く結びついている。

医療、ことに歯科医療にかかわる人は口や歯、舌といった目に見える器官の構造とその働きを研究し、それが損なわれた時、技術の力によつてこれを補うわけであるが、食べることの意味を「歯」だけに局限させて考えるのは一面的である。欠けたところのない、健康そのものの歯をもったからといって食べることが満たされるとは限らないのである。食べるものに事欠くような貧しい国もあるし、贅沢な食に囲まれながら精神的な孤独感を抱き、味気ない食事をとっている人もいる。食べるという問題は、考えてみると実に広く深い問題を私達に提起している。

ここでは④の視点に立って「正岡子規における食」ということを子規の作品を通して紹介してみたい（それは同時に①②③の内容にも関連してくることである）。子規は大病人であったが、その生き方は病者の生き方を考える一つの手がかりを提供していると思われるからである。

その前に「食べる」という言葉について触れておこう。この言葉は、古語の「たぶ」が変化したもので、「たぶ」は「たまふ」の転じた言葉である。「たまふ」は、もともと神仏や身分の高い人から物を「いただく」という意味で、へり下りの心を示す謙讓語であった。物をいただく中で最も多いのは、（御中元や御歳暮を考えてみればわかるように）飲食物であり、その恵まれた、「飲食物をいただく」ということから「たぶ」||「たべる」に「食」という漢字が当てられるようになった。すなわち「たべる」という言葉には本来「食う」―口にするという意味はなかったのである。

これに対して「食う」という言葉は、唇や歯ではさんでくわえるとか、噛む、噛んだり飲んだりしながら口から中に入れる、という意味で、まさに行為としての食事を表わす言葉である。現代では「食う」は卑語として意識され「食べる」という言葉が丁寧語として一般に普及しているのであるが、「食べる」は「いただきます」という、食事の時の挨拶言葉と同じようなへり下りの意味をもつ謙讓語だったわけである。それは単なる敬語とか文法の問題でなく、心の問題であり、食をどう見るかという問題でもある。

「食べる」ということは、その原義に立ち返って考えるなら、単に「食う」ことでなく、何者かから恵まれたものとしてへり下って、「食う」ことであった。へり下りの心は、同時に、与えられた食を感謝し、喜び、不足をいわない満足の心でもある。食前の「いただきます」という言葉が食後の「ごちそうさまでした」という言葉とセットになっているように、「たべる」という言葉の中には、本来、謙虚な、つつましい、感謝の念が込められていた。

一体、何に対して感謝し、何の前で謙虚に、つつましくしたのか。直接的にはその食物を恵んでくれた人であるが、人に恵まれた時にだけそういうのではなく、日常、三度三度、それを言うようにもなったというのは、その対象が直接は目に見えない神仏や自然の恵み、それを作り育ててくれた無数の人々、それら一切を含めたものに対する感謝の念にまで拡がったことを示すものであろう。ささやかな食事であっても、それを作ってくれた人の苦勞をしのび、雨や太陽など自然の恵みを思い、あるいは食べられない不幸な人、時代や社会を思い、ありがたい御馳走とじていただく心が「たべる」という言葉の中には潜在していた。昔の人はそのようにして「食べて」いたのではなからうか。

目に見えぬものに対する畏敬の念と、そこから生まれる感謝や謙虚な心を宗教だとするならば、日本語の「いただく」にはもちろん「たべる」という言葉の中にも、そうした宗教的感覚が潜んでいた、ということができよう。

## 二 子規の病氣

子規は二十二歳で喀血、これにちなんで「子規」と号した。「子規」は訓で「ほととぎす」と読み、その鳴き声が苦しげであるところから、また鳴く時に喉が赤く見えるところから「啼いて血を吐くほととぎす」といわれるように、血を吐く病い、即ち、結核の隠喩として使われてもいた。たとえば徳富蘆花の小説に『不如帰』（ほととぎす）と読む。この他に杜鵑・霍公鳥・時鳥など、いずれも「ほととぎす」と読む）があるが、これも主人公である美貌の人妻、川島浪子が、結核のために死んでいくという家庭悲劇を描いた作品で、当時大ベストセラーになったものである。

結核は昭和二十二年ごろまで病気による死因の中で第一位を占める国民病であり、不治の病い、死病として恐れられていた。子規も咯血して、己れの短命を自覚したが、それがかえって文学への情熱を燃え上がらせるバネとなった。二十六歳の時の東北地方への一ヶ月にわたる旅、あるいは二十八歳の時の日清戦争従軍記者としての旅（中国の遼東半島）は、いずれも医師に止められたものだったが、子規は文学に対する熱い思いから、これを無視した。その結果、二十九歳から満三十四歳で亡くなるまでの七年間を自宅（東京都台東区の根岸にある借家）での臥床生活を余儀なくされた。病名は肺結核の発展した脊椎カリエス（骨結核）である。脊椎は神経の中枢とも呼ぶべき器官で、その脊椎が結核菌のために侵されて腐っていくこの病気は、言語に絶する痛み、苦しみを味わうという。しかし、不思議なことにその文学、文学活動はまさにこの時期に円熟を示し、その作品には「痛み」「苦しみ」「絶叫」「煩悶」などという言葉が頻出してはいるが、たくましい気力・精神力と好日的な明るさ、ユーモアを失っていない。それはもちろん子規の人柄によるところが大きいのだが、単に「人柄」のせいだけとはいえないもろもろの条件があった。たとえば子規庵における妹（律）や母（八重）の献身的な介護、子規に活動の舞台を与えた『日本』新聞の社長である陸羯南、高浜虚子や河東碧梧桐、伊藤左千夫ら多くの弟子たちの手厚い看護（彼らは子規に文学を学び、子規と共に文学的精進に励んだが、介護、看護者としても大きな力となっていた）：こういったものも終末期を生きる子規の大きな支えとなった。子規はこれらの手厚い親切な援助を受けながら、病床生活を文学に専念して豊かに過ごすことができたのである。

以下、「食」という問題を素材として取り上げながら具体的にみていきたい。

### 三 療養法としての「うまいものを喰う」ということ

子規は『日本』新聞に連載随筆を書き続けたが、その中には自分の病状、病苦についての記事も数多く見える。当時の読者の中には、それを読んで、様々な療法（その多くは民間療法）を勧める人もあった。子規はそれに対して深く感謝しつつも、「小生の病気は単に病気が不治の病なるのみならず、病気の時期がすでに末期に属し最早如何なる名法も如何なる妙薬も施すの余地無之これなくの神様の御力もあるいは難およびがたき及かと存居候ぞんじおり」（『墨汁一滴』明治三十四年四月二十日の記事）と述べ、そのような次第だから「薬も灸もその他の療養法もせつかく御教被下候おおしえくだされことながら小生には難ほじしがたき施くことと御承知可被下候」と記している。

これは「諦め」というより「いさぎよい断念」といった方が適切であろうが、そのような「断念」の中にあつて「只ただ小生唯一の療養法は『うまい物を喰くふ』に有これあり之候」と記している。食くべることが唯一の療養法だということである。栄養価のあるもの、病気の回復に役立つものを食くべるのではない（回復の期待はないのだから）。「うまい物」を食くべるのである。卑語的ニュアンスの強い「喰くう」という言葉が、その貪欲な食欲、食くい気を伝えている。食くべることの快感を求めようとする心の表現といつてもよい。珍しいものは何でもうまいが、刺身は毎日食くべてもうまい。果物、菓子、茶など不消化でもうまいものを挙げ、「朝飯は喰くはず昼飯はうまく候。夕飯は熱が低ければうまく、熱あつが高くても大概喰くい申候。容態荒増あらましかくのごとくに如 此候」と結んでいる。

子規は舌の感覚が鋭敏であり、うまいものに対して敏感だった。うまいものを堪能し、うまいものを求め続けた。これは子規の若い頃からの特徴であつたが、ことに病気になつて楽しみが少なくなるにつれ、あさましいまでにう

まいものをむさぼり、楽しもうとした。病気の苦しみがその反動として、食の楽しさを求めさせた、といつてもいいだろう。

このように食うことが自分の療養法であると書き、好みの食べ物を書くことによって、読者の中には食物を贈る人も現われた。子規自身にそれを期待する心もなかったとはいえないだろう。それを単に卑しい行為とみるのは酷である。連載随筆は、先程紹介した例でわかるように、時として書簡的な性質をもち(候文は書簡文の文体である)、病者の寂しさから、人の好意を求めることもなった。それは人として自然であろう。そしてまた、病者を喜ばせ、慰めることは健康な者にとつても喜びであるに違いない。

#### 四 かしわ餅の歌—食の伝統・風雅の伝統

日本の伝統的な食物の一つにかしわ餅がある。蒸した上新粉の餅で、餡を包み、柏の葉でくるんだ菓子で、主として五月五日の節句に供せられ、俳句の季語(夏)にもなっている。古代には柏の葉を食器として用いたところから「かしわで」「で」はする人の意。「て」と同じ)といえ、宮中で食事の調理をつかさどる人、つまり膳夫、料理人をいう。

椎の葉や、桜、竹の葉なども食物を盛る器として使われたりするが、それらは、いずれも古い伝統をしのばせ、なつかしさをかき立てるものでもある。

子規は明治三十四年五月五日、かしわ餅を食べつつ、そうした古き日本を思い起こしてかしわ餅の歌十首を作り、『墨汁一滴』五月七日の記事としている。その詞書に「五月五日にはかしわ餅とてかしわ榲の葉に餅を包みて祝ふことい



ずこも同じさまなるべし。昔は膳夫ぜんぶをかしはでと言ひ歌にも『旅にしあれば椎しいの葉に盛る』ともあれば食物を木の葉に盛りしこともありけんを、今の世に至りて猶五日のかしは餅ばかりその名残をとどめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる」と記し、その第一首にいう。

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしはのもちひ見ればなつかし

(椎の葉に盛つて飯を食べたという昔の事も自然と思ひ出されて、かしわ餅をなつかしく思いつつ食べることだ)

かしわ餅を食べるといふところから、椎の葉に盛つて食べたといふ歌を思ひ起こし、古典の世界に心遊ばせている。第二首、

白妙しろたえのもちひを包むかしは葉の香をなつかしみへど飽かぬかも

(白い餅を包んでいるかしわの葉の香をなつかしみつつ、食つても食つても飽きずに食べ続けることだ)

風雅ななつかしい思ひと、粗野ともいえるような率直な食ひ気とが結びついているのが面白い。第六首、

かしは葉の若葉の色をなつかしみここだくひけり腹ふくるるに

(かしわ葉の若葉の色をなつかしみつつ、たくさん食べたことだ、腹ふくれるまでも)

風雅な詩情と大食というおかしみが結びついて、何ともいえぬ味を出している。歌の中で自らを大食漢だと、笑いつつ詠んだ歌人も少ないだろう。第九首、

みどり子のおひすゑいはふかしは餅われもくひけり病癒ゆかに

(男の子の健やかな成長を願つて食べるかしわ餅を、病気に苦しむ自分も食べたことだ。病気が治るようにという願ひ、祈りをこめて)

治るはずのない病気とあきらめつつも、かしわ餅を食べる―そこにはしみじみと病者の実感がある。かしわ餅を

食べるというのは呪術的な祈りの心が受け継がれているということでもある。食べるということは、そういう日本人の伝統に参加するということでもあり、食べることを通して古人の心とつながっていくことにもなる。

## 五 虫歯の苦しみ

子規はしばしば自分の病状、病苦を素材として作品を書いた。病気は苦しかったが、それを書いている間は苦しみを忘れ、書くことに没頭し、書くことを楽しむことができた。

虫歯の痛みなどという、ある意味で平凡な、日常的な苦しみも、子規の手になると、たちまち一編の見事な散文となり、長歌や反歌となった。それを示すのが『墨汁一滴』の五月九日の記述である。子規は次のように書いている。

「今になりて思ひ得たることあり、これ迄余が横臥せるに拘わらず割合に多くの食物を消化し得たるは咀嚼の力与つて多きに居りし事を。噛みたるが上にも噛み、和らげたるが上にも和らげ、粥の米さへ噛み得らるるだけは噛みしが如き、あながち偶然の癖にはあらざりき」

子規が若い頃から大食漢であったのは、ここでいうように、「咀嚼の力」に恵まれていたこと、つまり、顎骨も発達し、歯もよかったからであろう。それだけに味覚の快感を求めて、人より噛む回数も多かったものと思われる。十分に噛むことは消化に良いというだけでなく、深く味わうということでもある。

続いて次のように子規は書いている。

「斯く噛み噛みたるためにや、咀嚼に最も必要なる第一の臼歯左右共にようように傷はれて、この頃は痛み強く少

しにても上下の歯をあはすこと出来難がたくなりぬ。かくなりては極めて柔かなるものも噛まずに吞み込まざるべからず。噛まずに吞み込めば美味を感じざるのみならず、腸胃直ただちに痛みて痙攣けいれんを起こす。是ことに於いて衛生上の栄養と快心的の娯楽と一時に奪い去られ、衰弱頓とみに加はり昼夜悶々、忽たちまち例の問題は起る『人間は何が故ゆえに生きて居らざるべからざるか』

臼歯が傷われて(つまり虫歯になって)痛みを覚えるようになったため、噛まずに吞み込まざるを得なくなった。そのために腸胃が痛み、食事をとることも思うようにできなくなり、衰弱も加わった。それらの結果として、何のために生きているのか、という問題が頭をもたげてくるという。

病気の苦しみの中にあつて「書くこと」と「食ふこと」という二つの楽しみを大切な、生きがいとしていた子規からすれば、食べられなくなるというのは、生きていてもかいたくないことにもつながった。それにしても、うまいものが食べられなくなった、栄養がとれなくなったというところから、「人間は何のために生きなくてはならないのか」という形而上的な命題をつきつけるその取りあわせが、少々滑稽な感じもする。しかし子規は大まじめにこれを書いているのだらう。その大まじめぶりがおかしみを誘うのである。

この文章に続けて、つぎのような長歌を添えている。

「さえづるやから臼うすなす、奥の歯は虫ばみけらし、はたつ物魚いおをもくはえず、木の実をば噛みても痛む、武蔵野の甘菜辛菜あまなからなを、粥汁かゆじりにまぜても煮ねば、いや日けに我つく息の、ほそり行くかも」

(から臼のような我奥歯も虫に噛まれたようだ。畑でとれる野菜も、また魚も食うことができず、木の実を噛んでも痛む。武蔵野の甘菜辛菜、辛菜を粥に混ぜて煮ることもないので、いよいよますます、日ごと我つく息も細くなつていくことだ。)

この長歌に反歌二首を添えていう。

下総しもとうきの結城ゆうきの里ゆ送り来し春の鶉うずらをくはん歯はもがも

(下総の結城の里—長塚節の所から送られた鶉を食える歯が欲しいことだ。)

このころ子規を慕ってしばしば訪れるようになった歌人の長塚節が鶉の肉を贈ってくれた。その肉を食おうにも、ちゃんと食えるだけの健康な歯がないと嘆いたものである。実際には何とかその肉を食ったと思われるが、それにしてもしっかりと噛み、味わうことのできる健康な歯がほしいという気持ちは強かつたであろう。

菅の根の永ひとひき一日を飯もくはず知る人も来ずくらしかねつも

(菅の根のように永い春の一日を、飯をくうこともなく知る人も来ず、暮らしかねていることだ。)

食くべること、人と語りあうことは子規の大きな慰め、楽しみであった。しかしそれらの楽しみも味わうこともできず、無聊な時を過ごさねばならなかった病床の子規の感慨がしみじみと歌われている。

## 六 『仰臥漫録』に見られる様々な食(欲)の表現

### (1) 食の記録

『仰臥漫録』の半ばを占めるのは食(欲)に関する記述である。『仰臥漫録』は公表を予期しない、私的な日記であるだけに、きわめてリアルに自らの食(欲)について書くことができた。その冒頭に次のように記している。

「朝 粥四椀 はぜの佃煮 梅干砂糖つけ

昼 粥四椀 鰹のさしみ一人前 南瓜一皿、佃煮

夜 奈良茶飯四碗、なまり節 煮て少し生にても 茄子一皿

この頃いつも食い過ぎて食後いつも吐きかえす

二時過牛乳一合ココア交て 煎餅菓子パンなど十個ばかり

昼飯後 梨二つ

夕飯後 梨一つ

この調子で明治三十四年九月、十月の二ヶ月にわたる食事の記録が記されている。『仰臥漫録』の「仰臥」は仰向けに寝たきりの生活を余儀なくされている子規の姿勢を示したもので、「漫録」とはそぞろに、気の向くままに記録したという意味だが、その記録の中で最も重要な位置を占めるのがこうした食の記録である。

これを見ると、朝、昼、夕に分け、どんなものを、どの位食べたかを記し、間食や、おやつの類まで、漏らさず詳細に記している。

「日常茶飯」という言葉が示すように、飲み食いすることは、毎日の習慣のようなきわめて平凡な行為である。日記をつけている人は多いが、食事の記録をつけている人は少ないであろう。病人の場合、健康の管理のためにつけることがあるが、子規の記録はそれとも違う。なぜ子規はこうした記録をつけたのであろうか。それは、寝たきり生活の無聊を慰める一つの工夫であったとも考えられるし、また子規の一つの性向として、たわいもないささやかな出来事、見聞でもこれを記録する、という「記録癖」のようなものがあったからだとも考えられる。

しかし、それ以上に、食の記録は生の証であったのではないか。子規の食欲はきわめて旺盛で、「食い過ぎて食後いつも吐きかえす」と自ら記すほどである。俳句でも「栗飯の四椀と書きし日記かな」とか「栗飯や病人ながら

大食ひ」「かぶりつく熟柿や髯を汚しけり」などといった、あさましいばかりの食欲ぶりを誇示するような句がある。これがもし貧弱な食事であったなら、こうした記録も残す気にならなかつたであろう。豊富なメニュー、旺盛な食欲は（時にその反動で苦しむことがあるにしても）子規にとって生の喜びを示すものであり、生きていく証ではなかつたろうか。食うことは人間の本能であり、自らの旺盛な食欲を示す記録は、即ち、生への意欲の盛んであること、「元氣」であることを示しているように思われる。

(注) 『仰臥漫録』はすべて筆(墨)で書かれている。表記は片仮名と漢字を用い、ルビは一切施されていない。朝昼の「粥四碗」に対し、夕の「奈良茶飯四碗」と「わん」の漢字が原文で違っているのは、木の「わん」に対し、陶器の「わん」という違いがあるためであろう。

## (2) 回想としての食事

明治三十四年九月二日の項に次のような記述がある。

「松山木屋町法界寺の鱒どじょう施せ餓鬼がきとは路端みちばたに鱒汁あきな商あきなふ者出るなりと。母なども幼き時祖父どのにつれられて弁当持て往てその川端にて食はれたりと。尤もつとも旧曆二十六日頃の闇の夜のことなりといふ

餓鬼も食へ闇の夜中の鱒汁」

これは病床で母と故郷松山の思い出話を語り合った時のことをもとにして書いたものである。鱒汁は子規の好物でもあった。「餓鬼も食へ」という表現の中には、「思い出し食い」して、満腹している子規の姿がある、といえ

ば言い過ぎであろうか。

九月二十日の項には二十六歳の時、みちのくを旅した思い出―うまいものを食べた思い出が記されている。

「自分が旅行したのは書生時代であったので旅行とへえば独り淋しく歩行あゆいて宿屋で独り淋しく寝るものじゃと思ふて居る。それだから到る処で歓迎せられて御馳走になるなどという旅行記を見ると羨ましいの妬ましいのてて(おそらく子規の故郷松山の方言で「妬ねたましいのなんのつて」の意)」という前書きがあり以下、奥羽行脚のとき鳥海山のふもとのみすぼらしい宿で思いもかけない酢牡蠣すかきを食べた思い出が記されている。その結びに「(膳が来た)驚いた。酢牡蠣すかきがある。椀の蓋ふたを取るとこれも牡蠣だ。うまいうまい。非常にうまい。新しい牡蠣だ。実に思ひがけない一軒家のご馳走であった。歓迎せられない旅にもこの種の興味はある」と記す。かつて食べたうまいものを思い出して、あたかも今、まざまざと味わっているような記述であり「思い出し食い」「想像食い」ともいえよう。あさましい食欲の記述は、滑稽で吹き出したくなるが、子規とすればこれまた大まじめに書いたものと思われる。痴呆老人の回復の手立てとして「回想療法」というものがある。かつての元気で生活していたころのことを思い出して語ってもらうことは衰えた脳を活性化するのに役立つ、というのである。子規は野球好きであったが病床にあつて野球短歌を作り、その訳語を考えたりしたこともある。おいしいものを食べたことを思い出したり、野球を楽しんだ昔を思い出したりしたのは、子規流の一種の回想療法であり、病床にあつての楽しみ方であった。

### (3) 奇形的な食欲

たとえば梅干についての次のような明治三十四年九月十九日の記述。

「自分は一つの梅干を二度にも三度にも食ふ。それでもまだ捨てるのが惜い。梅干の核は幾度吸はぶつても猶酸味を帯びて居る。それをはきだめに捨ててしまふといふのが如何にも惜くてたまらぬ」

しゃぶり尽くし、味わい尽くさねば捨てられないという梅干の核への執着。あさましい、卑しい食い気の記述は、これまた正直、率直なだけに滑稽な感じを人に与えるが、まぎれもない実感だったのではなからうか。

この記述の後にさらに、貴人の膳などには無数の残り物―肴の骨の肉、味噌汁や吸い物の吸い残り、などがあるだろう、これを孤児院や養護院に寄付して喰わすようにすればよいだろう、などと提案しているが、まじめな議論というより、自らの食い気、食べ残しを想像してもつたいながる、というあさましさの表現といつてよい。

#### (4) 食べる物を通しての温かい交友

病床の子規のもとには全国から様々な贈り物が届けられた。子規はそれに対して礼状でもって応えた。たとえば「野郎氏に酬ゆ」と詞書して、

石の巻の長十郎が見舞かな

吾を見舞ふ長十郎が誠から

これは石巻の野郎氏から長十郎梨を贈られたのに対する礼状である。また「大阪青々に酬ゆ」と詞書して奈良漬の秋を忘れぬ誠かな

青々氏から毎年奈良漬を贈られてきたが、それに対する礼状中の一句である。これらは『仰臥漫録』中に記されている。『仰臥漫録』は書簡の下書きとして使われていたことを示すものであろう。



子規の書簡全体を調べてみると、食物を贈られたことに対する礼状がきわめて多い。それらの書簡は食物を送り、送られることを通して、人々との温かい交流が繰り広げられていたことを証明するものである。

(5) 共に会食することの楽しさ

子規は家族の団欒ということが子供達の教育にとってもきわめて大切だということを主張しているが、子規自身、家族と、あるいは弟子達と共に会食することをこの上のない喜びとした。会食の時はお互いにうちとけて語り合い、句会や歌会を同時に催すことも多かった。

次の長歌は『仰臥漫録』の中に「煮兎憶諸友」（兎を煮て諸友を憶ふ）と詞書して記されているものである。

「下総の節のもとゆ贈り来し柔毛兎を 厨刀音かつかつと牛かひの左千夫がほふり ふた股の太けきを煮て桐の舎と陽光ぞ食す あなうまそそびらの肉の 炙れるを病む我取らん 残れるを秀真もがもな 家遠み 呼ぶすべをな みもみぢ葉の赤木も岡もあはれ幸なし」

（下総の国に住む長塚節から贈られた毛の柔らかな兎を、台所の包丁でかつかつと、牛飼いの左千夫が切り、二股の太い肉を煮て桐の谷と陽光とで食べる。ああ、うまい。ひら肉のあぶつたものを、病気の自分から食べよう。残つたものを秀真が食べるよ。家が遠くて呼ぶこともできない、赤木も岡も気の毒に、運の悪いことだ。）

要するに桐の谷や陽光と共に食った兎の肉のうまさよ、その肉を食べない赤木や岡の気の毒さよ、というわけである。何という無邪気で明るい長歌であろう。子規の遊び心、茶めつ気があふれている。そうした遊び心を失わずに生きていけたのは、共に会食にあづかるうちとけた親しい弟子達―「諸友」がいたからである。子規の文学（活

動)は共同体の文学(活動)といつてよいが、それは共に会食する温かい雰囲気、団欒の中から育てられたといつて過言ではない。食へることは、この意味では、決して己れ一人の快楽ではないのである。